奈良県・韓国ゆかりの地紹介

第五弾　　法隆寺・中宮寺

今年は、奈良県と韓国忠清南道が 2011 年に友好提携を締結して 10 周年を迎える記念の年です。これを記念して、奈良県内にある奈良と韓国とのゆかりの地、特に忠清南道とのゆかりを中心にご紹介しています。第五弾となる今回は、法隆寺と中宮寺をご紹介します！

法隆寺

奈良県斑鳩町にある「法隆寺」は、百済から仏教が公伝した後、仏教を広め、国の礎を築いた聖徳太子ゆかりの寺院です。601 年、聖徳太子が斑鳩の地に斑鳩宮（いかるがのみや）を造営し、607 年頃、その近くに亡き父・用明天皇のために建立したのが法隆寺（斑鳩寺）だと言われています。「日本書紀」によると、670 年に創建時の伽藍は焼失したとされ、その後間もなく再建されたと考えられています。また、法隆寺と法起寺は、1993 年に「法隆寺地域の仏教建造物」として、姫路城とともに日本で初めて世界文化遺産に登録され、現存する世界最古の木造建築物群としてよく知られています。

法隆寺

西院伽藍（さいいんがらん）最古の建築である金堂には、中の間に国宝「釈迦三尊像」、東の間に国宝「薬師如来像」、西の間に重文「阿弥陀三尊像」がそれぞれ安置されています。「釈迦三尊像」は、渡来系の鞍作止利（くらつくりのとり）により造られたものであることが光背（こうはい）の裏面に刻まれています。

中宮寺

法隆寺の近くには、聖徳太子が母である間人（はしひと）皇后のために建立したとされる「中宮寺」があります。本尊である国宝「木造菩薩半跏像（もくぞうぼさつはんかぞう）」は、韓国の国立中央博物館に収蔵されている韓国の国宝「金銅弥勒菩薩半跏像（こんどうみろくぼさつはんかぞう）」とよく似ているといわれています。弥勒信仰が盛んだった韓半島で弥勒菩薩の半跏思惟像（はんかしゆいぞう）が造られるようになり、日本にもその文化が伝わったと考えられます。

このように古代から伝わる仏教建築や仏教彫刻などを通じて、昔から日韓の深い交流があったことが分かります。皆さんも斑鳩の地に建つ古代からのお寺、法隆寺と中宮寺に足を運んでみてはいかがですか。

（奈良県国際交流員　南　炫汀）

国宝　木造菩薩半跏像

（写真提供：奈良国立博物館）